

はたらく若者

第2回

終身雇用制度が当たり前でなくなり、働き方が大きく変化している今日。一人ひとりで見ると、よくある話かもしれませんが。でも複数回を並べてみると、そのはたらく姿から現代の若者のすがたがあぶり出されるのではないか。「はたらく」から若者の今を見つめます。

菅野 晶さん 28歳
就労継続支援B型事業所職員

現在の仕事と、そこに至るまでの経緯を教えてください。

就労継続支援B型事業所で職員として働きながら、定時制高校に通う生徒の支援活動をするNPOに関わったり、趣味で絵を描いたりしています。

山形県で生まれ育ち、中学・高校時代はほとんど学校に行っていない、いわゆる不登校でした。行けない理由が自分でもわからず、とにかくしんどくて行けない。解決しないまま、もやもやとした日々を過ごしていました。接客の仕事をしていましたが、家に居づらいしんどさも重なって「もうこれ以上がんばれない」と思い、2年半前に関西に引っ越してきました。

接客の仕事も好きでしたが、拘束時間が長く、色々なところでうまく回らなくて、体調を崩してしんどくなり、そのとき「働く」ってどんなことなんだろうと考えました。しんどくなる自分が悪いから自分を責めるべきなのか。また、自分に自信がなく、仕事は選んではいけないとも思っていました。でも、色々と考えた結果、週3日勤務で、時間も内容も自分にぴったり今の仕事にたどり着きました。

働くことを意識したときに、もっと自分自身を大切にしつつ「自分がどうするべきか」というのがあって、働くということがあるのだと感じました。

はたらくって何ですか。

就労継続支援B型事業所では、利用者さんのクッキー作りや内職などの軽作業を補助するのが主な仕事です。いわゆる、一般社会に入りづらい人たちの「当たり前」に入るということは、自分の価値観を根底から考え直すきっかけをいただいている感覚になります。今まで自分が押しつけられてしんどかったことや、自分が疑問に思っていたことが、その人たちの社会に入ると、「そんなのしんどくて当たり前だよ」とか「できるってすごいね」という感覚があり、「本当のことってどんなことだろう」とよく考えます。いまは正しさというのは人それぞれで、社会において「こうでなければならぬ」というのが、ほとんどないような気がします。今までの生活の中で出会わなかった人とかかわる機会となっていて、とにかく楽しくて、毎朝自転車で20分、髪の毛を振り乱して出勤しています(笑)。



絵を描くことが好きというところで素敵な絵を描かれますね。

好きなときに、好きな絵を描いています。絵の展示などを必死にがんばった時期もありましたが、展示をするとギャラリーに「売れるもの」を求められ「それは自分でできるのか」と思うと同時に、自分は何のために描いているのかと悩みました。絵を描くことは、誰かに認められたいというよりも、好きなものや言葉にならない気持ちを絵に描いて自分の気持ちを整理する時間でもあります。また描いた絵を見て、改めて自分に気づいたり、絵を見た人に言われて気づいたり、コミュニケーション手段の一つでもあります。

絵を描くことを仕事にしている友だちもいて、単純にすごいと思いますが、私はそれを選択しませんが、



した。働くことにもつながりますが、関わり方は人それぞれで、何を求めているかは人によって違うのだと、絵を通して感じています。

「暮らすこと」についてどう思いますか？

他人にどう言われようが、自分の好きなことができる時間や場所だと思っています。お散歩も趣味で、川沿いを散歩しながら、河原で鳥の羽を拾ったり、キツツキを見ついたり、野ばらを摘んでドライフラワーにしたりと、自分が好きで楽しいと思えることをしています。なんでもない好きなことを、こちらに来て強く意識するようになりました。

菅野さんの「はたらく観」とは？

今までうまくいかない経験も多かったけれど、自分が自分らしくあって、はじめて仕事も満足できる瞬間があると思います。

あとは楽しむこと。楽しむには何を選び、どのような形態で働くのか、自分がどうすることを望んでいるのかが分かって初めて選べることができ、楽しむ余裕ができるのだと思います。

自分の考えですが、無理してもあまり良いことはないのかなと思います。年齢によっても違うと思いますが、その時の最善を尽せるように、自分の本当の気持ちを大切にしていきたいです。